

江戸時代の景観と名所の記憶

一有明浜・善通寺・金毘羅をめぐる



愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長

胡 光
(えべす ひかる)

有明浜の景観

津屋崎村（福岡県福津市）の豪商佐治家一行7人が、弘化2年（1845）に行った四国遍路の記録「四国日記」（佐治洋一氏蔵、福岡県立図書館保管）を読み進めます。船で三津浜に上陸し、太山寺を打ち初めに四国を北上、55日で一周します。日記には、日々の歩いた距離、札所数、接待数、宿泊場所、費用、食事などが詳細に記録されており、今回は、四国霊場以外の名所をめぐる時に見た、江戸時代の景観について考えてみます。

前号で紹介した、伊予国最後の札所六十五番三角寺とその奥之院仙龍寺を出発すると、山道を歩き、佐野村（徳島県三好市）から六十六番雲辺寺へ登ります。現在は香川県側から登り降りしますが、徳島県側から登り、香川県側へ降りるのが通常ルートでした。徳島県にある雲辺寺は、讃岐の打ち始めとされます。「讃州一の高山」と記されたこの地でも接待が五つもありました。接待をしたのは、白地村（徳島県三好市）の人たちでした。

山を下り、栗井村大師堂（香川県観音寺市）で泊まった翌日、六十七番大興寺を経て、観音寺の町へ向かいます。両替商がいる大きな町を通り、琴弾山へ向かいます。山頂にある六十八番琴弾八幡宮へ参りますが、現在の六十八番札所は、明治維新の神仏分離令により、中腹にある観音寺境内の神恵院へ移りました。

寺院には、山号・院号・寺号があり、一体のものでありながら、本来、僧侶が住み寺務を執る「院」と仏様（本尊）を祀る「寺」は区別されていました。「五岳山誕生院善通寺」は今でも西院・東院

に分かれていて、西院は「誕生院」と呼ばれ僧侶が住む寺務ゾーン、東院は「善通寺」として本尊薬師如来を祀る金堂を中心とした仏様ゾーンでした。このため、江戸時代の書状は全て「誕生院」あてに出されています。

七宝山神恵院観音寺は、僧侶が住み、琴弾八幡宮の世話もしていた神恵院へ六十八番札所が移り、本来の六十九番札所は観音寺に残ったため、同じ境内に二つの札所が存在することになりました。このため現在、神恵院には寺号が、観音寺には院号が付けられていません。

さて、江戸時代の遍路は、山頂の八幡宮にお参りした後、ここから雄大な瀬戸内の風景を見て「言葉にすることができ



旧六十八番札所 琴弾八幡宮

瀬戸内海沿岸地域から奉納された多数の玉垣は信仰の広がりを示している。



現在の有明浜（国名勝琴弾公園）

ない」と記しています。大岩がある場所には茶店があり、眼下に白浜をながめ、「瓦け」投げを楽しんでいます。ところが、当地の名物「寛永通宝砂絵」の記述は全くありません。現在でも人気の観光スポットである山頂から砂絵を見る眺望は、時代劇「銭形平次」のオープニング映像としても記憶されます。

この砂絵は、江戸時代の初め、寛永10年（1633）、時の藩主・生駒高俊公を歓迎するために一夜で作ったと言われていますが、遍路日記には登場しないのです。讃岐国の名所を網羅した、安政4年（1857）の序文がある『讃岐国名勝図会後編』（内閣文庫蔵）にも紹介されておらず、砂絵の景観は明治時代以降に誕生したのではないかと考えられます。

大師生誕の善通寺から金毘羅さんへ

令和5年（2023）は、弘法大師として親しまれる空海が、奈良時代末の宝亀5年（774）に善通寺の地に誕生して1250年の記念すべき年とされ、四国霊場や四国各県で様々なイベントが開催されています。誕生地善通寺でも、4月23日から6月15日（生誕日）まで記念大法会が行われていて、連日、弘法大師に関わる寺院や団体が法要を行っています。併せて、秘宝「瞬目大師像」の特別公開もあります。この像は、唐に渡る時、母のために大師自ら描いたものとされ、鎌倉時代に土御門天皇がご覧になった時、瞬きしたと伝えられます。

江戸時代の遍路も弘法大師ゆかりの地を意識して歩いています。七十一番弥谷寺に向かう途中では、7歳の大師が遊んだ場所に参り、弥谷寺では大師が学んだ学問所として、草鞋を脱ぎ足を洗って岩屋に入り、御自身が彫られたという童像と両親の像を拝しています。

ちなみに、江戸時代の弥谷寺周辺では、弘法大師が誕生したのは、母の館があったという場所に近い海岸寺で、父は藤新大夫、母はあこや御前と信じられていました。この説を主張する海岸寺と善通寺は、生誕地をめぐって裁判となっています。善通寺は、父佐伯田公（後に善通）の邸で誕生し、母は阿刀氏（後に玉寄姫）と伝えていました。丸亀藩は、文化14年

（1817）善通寺を誕生地とするよう判決しました。

この判決の後に歩いた遍路たちは、日記に善通寺を「御誕生の地」と記し、海岸寺には立ち寄っていません。大師堂は大きく、ここでも両親の木像を拝しています。さらに細長い堂では、大師の一生を描いた絵をかけ、解説がありました。「四国一の寺で上方でも有名だ」と記されます。この日は、3月26日。大師入定の日（永遠の瞑想に入った日）3月21日に近く、市や茶店が出てにぎやかであったようです。境内でご飯の接待を受けており、このあたりの接待は、備中国（岡山県）から来て行っていました。

善通寺を出た一行は、金毘羅さんに向かいます。61年ぶりの宝物開帳と歌舞伎を見物したことは、前号で紹介しました。善通寺から次の札所・金蔵寺へは、北へ向かいますが、江戸時代の遍路は南へ向かい、必ず金毘羅さんを参拝しています。終日ここで過ごし、泊まっているのです。

江戸時代の遍路は、八十八ヶ所だけでなく、奥之院はもちろん、有名な寺社や名所も訪れていました。その旅は、弘法大師への信仰に基づくものでしたが、すでに「観光」的な要素を含んでいて、日記の記述からは江戸時代の名所の景観がよみがえってきます。



重要文化財善通寺金堂
見学する愛媛大学生

【参考文献】

伊予史談会『四国遍路記集』伊予史談会双書、1981
塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路と世界の巡礼（上）最新研究にふれる八十八話』創風社出版、2022